

学長対談

奈良教育大学学長
長友恒人

(独) 大学評価・学位授与機構 客員教授
奈良教育大学理事(渉外・連携担当)
鷺山恭彦

教員養成をめぐるのは、折りしも6月、川端達夫文部科学大臣から中央教育審議会へ諮問「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」がなされました。今後、教員養成大学はいかにして、学校現場に多様かつ実践力のある優秀な人材を送り出せるか、その真価が問われることとなります。今回、新たに本学理事として就任いただいた前東京学芸大学学長の鷺山恭彦氏との対談を通して、教師を目指す皆さんへのメッセージをお伝えします。

【撮影場所】
教育資料館『新薬師寺旧境内遺跡展』
(平成 23 年 1 月 29 日まで開催)

3 【巻頭特集 学長対談】

長友恒人学長 × 鷺山恭彦理事

8 幅広い知識と経験を 特色あるプログラム

新理数プログラム
あなたも理数で輝く先生に！ 理数教育研究センター長 松山 豊樹

食育リーダー養成プログラム
地域・学校の食育を支援します —「食育リーダーの養成」—
生活科学教育講座 教授 鈴木 洋子

「地域と伝統文化」教育プログラム
地域の誇りを世界へ 美術教育講座 教授 山岸 公基

海外留学プログラム
世界へ羽ばたき国際交流 キャンパス内で気軽に国際交流
副学長(国際交流・地域連携担当) 加藤 久雄

12 ぶらり散策ガイド

～平城遷都1300年祭 平城宮跡会場～

14 ラボ・レター

学校教育講座 准教授 根来 秀樹

16 【留学生レポート】

アメリカが私に教えてくれたこと

学校教育教員養成課程 4 回生 木村 祐葵

24時間、学びの時間

日本語・日本文化研修留学生 ダリオ・イマス

18 ひと・あれ・これ

生駒市立 鹿ノ台小学校 常勤講師 金 秀勇

20 【キラリ☆奈教生】

第84回国展 千野賞受賞!

彫刻を通じ空洞の果てなき魅力に迫る!!

大学院 教育学研究科 修士課程 2 回生 山下 圭介

22 【課外活動】

男子サッカー部 男子サッカー部はファミリー

主将 福嶋 亮輔

漫画研究会 やりたいことがやれる場

部長 田中友貴恵

23 活躍する奈良教育大生

24 奈良に息づく仲間たち

自然環境教育センター長 教授 鳥居 春己

ならやま
2010年夏号

CONTENTS

〈表紙題字〉
名誉教授 池田桂鳳

表紙紹介

夏

夏といえばセミの鳴き声を聞きながら、たまった宿題に追われた子ども時代を思い出します。

高校生ら受験生にとって、夏は進路決定の時。最近では進路を定める時期も早まってきているとは聞きますが、奈良教育大学にとっての夏は、そんな高校生たちへ大学を紹介するオープンキャンパス(7月31日)を開催する季節です。

例年、奈良教育大生が案内をつとめ、自分たちの大学のすべてを参加者に紹介しています。そんな自分たちの大学を愛する奈良教育大生によって奈良教育大学は支えられています。

表紙はオープンキャンパスの広報ポスター撮影での1枚。

撮影には、キャンパスで学ぶ留学生や野球部員、理数科学生など多様な奈良教育大生が協力してくれました。

決して大きな大学ではないけれど、フレンドリーでチームワークある学生たちが奈良教育大学の自慢です。さわやかな彼らには、夏の緑が本当によく似合います。

(企画・広報室)

撮影協力(敬称略)

(上段左から)

Dragomir Andreea Florentina、
白井晶浩、なつきよん's CLUB、
中川由利恵

(下段左から)

原佑輔、Nguyen Kieu Giang Huu
陳少鵬、Imaz Cesar Dario

ポスター制作

なつきよん's CLUB

甲斐由里恵、中川由利恵、
浜田丹生、原佑輔



長友恒人
ながとも つねと
1943年9月生まれ
京都大学大学院修了
専門は物理学、文化財科学
昭和48年本学助手
平成3年教授、副学長などを経た後、
昨年10月から本学学長。



鷺山恭彦
わしやま やすひこ
1943年2月生まれ
東京大学大学院修了
専門はドイツ文学、ドイツ社会思想
平成15年から今年3月まで東京学芸
大学学長。4月から本学理事。

長友恒人学長（以下 学長） 鷺山先生は、東京学芸大学学長として、また、日本教育大学協会の会長として、6年余り広い視野から教員養成のために貢献してこられました。先生を、新理事としてお迎えできたことを大変嬉しく思っております。はじめに、先生にとって奈良はどういうところでしょうか。

鷺山恭彦理事（以下 鷺山） 奈良というところ、青丹よし ならの都は 咲く花のおふが如く 今盛りなり」の歌を直ちに思い浮かべます。小学校5年の時に、初めて覚えた和歌です。絢爛豪華で素晴らしい所というイメージですね。中学校の時に法隆寺、東大寺に修学旅行に来て以来、今回で3度目になります。

3度目の出会いが奈良教育大学の理事ということ、こんなに光栄なことはありません。しかも今年は「平成遷都1300年」でしょう。奈良教育大学の発展のために微力ながら尽したいと思えます。

「記憶の深い人間」に――奈良でこそ

学長 奈良教育大学は、東京学芸大学と

ドイツ語教師――「実学」でなく「虚学」に賭ける

学長 先生は、ドイツ語を教えてこられました。

鷺山 新課程に欧米研究専攻ができてからは専門のドイツ文学・思想の講義をしましたが、主には、1年生と2年生のドイツ語を教えてきました。専門の違う全学の学生を対象として面白かったのですが、ごく一部の人を除いて、卒業したらドイツ語はいらなくなる。無意味になるものを教えるわけですから、教える意味を考えましたね。

英語以外にも一つ言語を学ぶことで、語学へのセンスを養う、ドイツの文化を知る：単にドイツ語を教えるのではなく、ヘッセやトーマス・マンやゲーテといった作家、カントやヘーゲルといった思想家たちの言葉、あるいはドイツの歴史を通して、ドイツの特殊性と普遍性、人間の根底に触れる授業をと思いました。役に立たないだけに、普遍的なものに触れる、真理と真実に触れる、そして魂に触れる、そういうことを考えました。しか役に立つ学問はもちろん大切ですが、しか

違って、規模は小さいですが、それを逆手にとって奈良の特色や魅力を出しているようにしています。今まで外から本学を見てもらえていかがでしょうか。

鷺山 私の専門はドイツ文学なのですが、ドイツでは、百万人都市というと、ミュンヘン、フランクフルト、ベルリン、ハンブルグくらいのもの。あとは二十〜三十万人の都市で、これが素晴らしい。まとまった一つの親密圏をつくっています。学生も地域に溶け込んでいて、生活するにしても、勉強するにしても落ち着いた良好な環境になっています。ドイツ語でアングレネムクライン（コンフォタブルスモール、心地よい小さな空間）という言葉がありますが、そういう感じが奈良にも本学にもありますね。

それに、こんなに古い歴史があるところは日本では他にはありません。大変な所に住んでいるのだから、学生のみなさんは、飛鳥、白鳳、さらには百済と、奈良に関わる歴史は徹底的に学んでもらいたいですね。

過去をしっかりと知ること、これは、直面している現代的課題に対しても、それだけ深し「実学」は、当面のことに規定されすぎて、意外と浅かったり、賞味期限があったりする。ドイツ語のような役に立たない「虚学」の方が、普遍的、永遠の相のもとにある。大学ではこうした観点から学び、教えることが大切だと思います。

素粒子論だって、天文学だって、役には立たない。でも、物質はどう由来し、どういう構成か、宇宙はどう生成していくのかは、人類の根源的な関心事でしょう。大学ではやはり「虚学」に賭けないと。そこで本質に触れる。こうした原理的なことをよく考えると、社会に出て、自然・人間・社会について、本当の見識が発揮できるのです。

学長 学生の学びを「実学―虚学」の関係で考えられたわけですね。

鷺山 そうです。そして知的関心を触発する授業をどうつくるかですね。夏休み、秋休み、冬休みとあるものですが、ドイツ関係のみならず、いろいろな本を3冊はレポートさせました。授業で学生に3千円は散財させましたね。レポートをちゃんと出した人には最低点はつけるようにしました。それでもダメな学生には、ドイツ語で

く考察できるし、対応できるということですから。そうした素晴らしい人間的・教養的基盤の上に、いろいろな専門が研究できる、そしてそれが次世代への教育に還元される。奈良教育大学ならではのことで、規模からいってもきめの細かい教育ができますから、可能性をいろいろ考えられると胸がときめきます。

学長 世界遺産になるような古都奈良にあっても、意識してみないと歴史が身についてこない。極端な場合は、奈良教育大学に在学している4年間に一度も、大仏様をみたことがない。いつでも行けると思っているうちに卒業してしまっただというケースも。

鷺山 意識性がないとダメですよ。私も静岡県生まれですが、富士山に登ったことがない（笑）。

学長 古都にあるということで、過去をどう活かしていくかということだと思えます。昔のことを単に振り返るのではなく、それを現代の課題に照らしてどう活かしていくかの視点をもって見ていくと、過去も活きますね。

鷺山 「伝統と革新」と言いますが、伝統は、まず学ばないといけない。革新は、今日の色々な課題に敏感であった時に、初めて学んだことをどう活かせるか考えるわけで、現代の課題への鋭敏な問題意識をたくさん持たないと、活かせませんね。

これまでの学問成果や文化遺産を徹底して学び研究すること、それと同時に、今日の課題へのセンスを磨くこと。このダイナミズムを自覚的に身に付けたいですね。

『野バラ』を暗記して歌ってもらおうとか。

今、思いがけないところで「先生にドイツ語を習いました」という人に出会います。若気の至りで何を教えたのか冷や汗がでるのですが、いろいろな試みをするのが大切ですね。自分が面白いと思うことが大事。

コミュニケーション――語り合う仲間がいる

学長 先生ご自身の学生時代は、どうだったのでしょうか。

鷺山 学生の頃には、「道」を求めていたと思います。如何に生きるべきなのか、何のために生きるかと。私がドイツ文学を選んだのも、ドイツには「教養小説」の系譜があって、主人公がいろんな人と出会いながら自己形成をしていくことに惹かれたからです。

一人で考え込んでいると、自分の枠を出ません。1部屋6人の学生寮の生活を2年間経験しましたから、いろんな人と議論をしつつ、観点を突き詰めたり、広げたりして、自分の意見を形成していくことの大切さを学びましたね。

専門に進んでからは、3〜4人の読書会のグループを作って、トーマス・マンの『魔の山』を読んだり、ヘーゲルの『精神現象学』やマルクスの『経哲草稿』を読んだりして、そこでの議論は今でもどこかに残っています。

学長 先生と私は同じ世代だから、今のお話をよく理解できます。大学で留年が決まったとき、約3ヶ月間、授業をさぼって、朝から晩まで本を読んでいた。50日で60冊読んだと記憶しています。



でも、夜になったら友人の下宿へ行って話し込んだり、酒を飲んだりしていました。今思うと学生時代、何を悩んでいたのかと思えますね(笑)。若者の悩みの基本は昔と変わらないのでしようが、今の学生が何を考えて、何を生き甲斐としているのが、私たちはきちんと掴めていない。

鷺山 みんな悩んでいて、いろいろ考えていると思います。でも私たち教員は自分の学生時代のイメージでしか、掴めていないのかもしれないね。

は大きいですよ。

学長 ハウツーものでだけ教えていると、教師になってから力は伸びません。

鷺山 おっしゃる通りに、教え方だけやっていてもだめで、やっぱり「学問」です。つまり、「問うことを学び、学ぶことを問う」。それがないと、ハウツー人格になってしまふ。生徒たちはそれがわかって、見抜かれてしまふ。人間の魅力は、存在に「凄み」のあること。学問と取っ組み合い、辛い体験や失敗も含めた経験をたくさんしないと。

**キャリア教育—
将来の仕事の意義をどう伝えるか**

学長 キャリア教育(職業観・勤労観の育成)の柱は、自分の人生の中に仕事をどう位置づけるかということだろうと思います。それが明確になれば、自分に適した仕事を選ぶだろうし、壁にぶつかっても新しい意義を見いだすことができるでしょう。

その仕事が教師なら、入学後からずーっと子どもをみて、さらに教育実習で接し、教師という仕事が素晴らしいと身体で実感することがとても大事なのだらうと思えますね。ただ、その場合に、先ほどからのお話と関連してきますが、経験だけではなくて、教育という仕事を論理的に捉えられる思考力が備わっていることが必要です。

鷺山 教育って素晴らしい仕事です。人間の成長や発展に関わり、人類の産み出した成果や遺産を未来に創造的に託していく仕事なのですから。

学長 その確信は大切ですね。ただ教師に

学長 そういう意味では、コミュニケーションがとても大事で、他人の発言の中に自分の発想で出てこないものを見つけることができる。コミュニケーション力というときに、学生同士あるいは先生とのやりとりの中で、自分の考えなり、感じたことを正確に伝えることと、正確に聞き取ることの両方ができるようになると、スムーズにいくのだらうと思えますね。

鷺山 おっしゃる様に「聞く力」も大切です。今その力が落ちてきているといえます。みんな自己中心になっているのでしょうか。おっしゃる様にコミュニケーションをいろいろな局面で構成して、問題を共有していくことが大切ですね。

**教師として、人間としての魅力—
それは「学び」と「体験」の深さに**

鷺山 奈良教育大学では、昔から実践を活かした素晴らしい取り組みを様々にされていますね。

学長 代表的な取り組みとして、「新理数プログラム」があります。「理数教育研究センター」を中心に地域の小学校、中学校や高校などと連携して「理数科離れ」対策に取り組んでいます。このプログラムに参加した学生たちは、理数科の先端的な知識と教育実践力を確実に身につけています。

3月に三重県との県境に近い曾爾村の中学生を対象にしたウィンター・スクールに同行した時、学生たちが授業をし、積極的にアシストをしている姿を見て、こんなにも生き生きと逞しいものかと思いました。

鷺山 全国の教員養成大学のモデルとなる素晴らしい取り組みです。とりわけマネジメンタルなところが、これからは必要なんだと思いますね。

鷺山 おっしゃる通りです。教職大学院はそのために出来ましたし、既設の大学院では教科専門的に研究できますから、教師になった人たちが大学院と何らかの関わりを持つことは、これから重要なんです。その場合、大学教員として教える側の力量も問われますね。

学長 それは重要です。大学教員も、自分が教員養成大学において、将来教師になる学生たちを前に教えることの重要性をどう自覚し、考えるかが大事なところなんです。自分の専門を教授するだけでなく、教育や教育現場と関わらせる問題意識を常に持つことがこれからはますます求められますね。

鷺山 学校現場は、今、当面の新しい課題に振り回されて大変ですね。教育実習に行くと、教師になることに不安を感じるような局面もありますから。事態を正確に掴めるように豊かな分析力を培うことや、解決方法の探究は大切ですが、最終的には技術でも何でもなく、「あの先生と話したい」という人間の魅力がポイントではないでしょうか。そのためには心の修養も積まないと。

**「憧れに憧れる」—
それが教育の本質**

学長 私は学長に就任した際、「教育とは、ロマンに満ちた価値ある営み」と言いました。

一方で、教育現場から求められる教員の資質として、たくましさ、しなやかさ、打た



メント能力などは講義では身につけさせません。いろいろな活動をし、実践してみても、はじめて身につくものです。

体験は大事ですよ。教育現場に行くことはもちろん、語学滞在して外国でいろいろな友人をつくったり、海外協力隊やワーキング・ホリデーにも行って欲しいですね。体験蓄積と体験止揚、それを踏まえての自己形成——これが大学生活の基本でしょう。

それに、教科の学びで大事なことは、古典との対話です。先ほどド・トマス・マンやヘーゲルを挙げましたが、「対話」と言うより、よく判らないから「取っ組み合い」ですね。そこに大学教員も一緒に加わると、思想の核心や学問のツボがわかってきます。

学長 理科系で言うと、研究論文を沢山読むということですね。そうすると研究とは何か、ということやアプローチの仕方がわかってくる。教師になった後の分析力はそこから出てくるのだと思います。

鷺山 文献や論文を読む癖がついた人は、アプローチする方法論を自然に身につけますね。探求心が更に増し、拓けていくことのおもしろさを体感できる意味が強さが必要なのではないでしょうか。

鷺山 フランスのジラルールでしたか「憧れに憧れる」ということを言っています。あの先生は素敵だ、だから私もあの先生のようにになりたい——憧れられるような先生は、その人自身が憧れを持っているからなのだと。

学長 そういう魅力が人を惹く。そういう魅力ある人材をいかに送り出していくかですね。

鷺山 中教審答申などでは、いろいろ教員の資質についての言及がありますが、学長の言われるように、まずロマンであり、憧れでしょう。その後から、たくましさ、しなやかさ、打たれ強さがついてくる。

学長 今年から、新たに第2期中期目標期間(6年間)がスタートしました。奈良県もそうですが大都市圏ではこの期間中は当面、教員の需要はあると予想されています。そういうときだからこそ、教育の質をどう高めるか。つまり、教育の質保証をいかに形あるものとして実現していくかが課題です。

教師として教える能力の質と教師としての資質(子どもに接する、学校経営に参加できる、保護者と対応できるなど)、その両方の質を高めるためにどう工夫し取り組んでいくかだと思いますね。

これからも、様々な場面でご助言ください。本日は、ありがとうございます。